社会福祉法人　児童養護施設
花園精舎
HANAZONO SEISHA



ANNUAL JOURNAL / 2025

# HANAZONO JOURNAL

子どもたちの学びと成長をつなぐ、一年の記録。



2025

社会福祉法人 花園精舎
ANNUAL JOURNAL

CONTENTS

# この一年の、小さな一歩。

令和7年度の活動を振り返って


03 ごあいさつ
施設だより発刊に寄せて

04 新入園・入学お祝い会
新たな門出を祝って

05 小学生 春キャンプ
自然の中で、力を合わせて

06 花園精舎 子ども祭り
友達と共に楽しんだ特別な一日

07 中高生旅行
恵那峡散策とラフティング体験

08 施設運動会 祝勝会
ユニットごとに喜びを分かち合う

09 USJ外出行事
みんなで過ごした最高のUSJ

10 クリスマス会
一年の努力を讃える時間

11 学校との連携
英田南小学校との交流会

12–13 防災研修
災害時にも、暮らしを守る

14 施設見学会
次世代を担う保育・福祉人材と

15 ご支援への感謝
寄付・寄贈／苦情申し出窓口

16 お問い合わせ
施設所在地・連絡先


本誌の写真は原本の掲載写真を使用しています。
個人情報保護のため、一部にぼかし加工があります。
表紙・裏表紙は、日常の遊びやつながりをイメージした生成画像です。

MESSAGE

# 安心して、自分らしく。

施設だより発刊に寄せて



社会福祉法人 花園精舎

**理事長兼施設長　照井眞哉**

春の足音が聞こえ、桃の節句を過ぎる頃となりました。皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。令和7年度も締めくくりの時期を迎えました。この一年を振り返りますと、子どもたちが日々の生活や学習の中で、一歩ずつ、しかし確実に成長していく姿が深く心に残っております。

特に本年度は、子どもたちの「学び」と「自立」に向けた環境づくりに力を注いでまいりました。新しい試みの中で、戸惑いながらも一生懸命に取り組む子どもたちの瞳には、未来を切り拓こうとする力強い意志が宿っていました。

こうした歩みを進めることができましたのも、偏に地域の皆様、ボランティアの方々、そして多大なるご支援を寄せてくださる関係各位の温かいお力添えがあってこそと、深く感謝いたしております。間もなく訪れる令和8年度も、当施設「花園精舎」は、子どもたちが安心して自分らしく過ごせる「心の拠り所」であり続けるよう、職員一同精進してまいります。

最後に、皆様のますますのご健勝を祈念いたしまして、年度末の挨拶とさせていただきます。

## 子どもたちの「学び」と「自立」に向けた環境づくりを、これからも。

**発信元情報 / 広報委員会**

総務　照井道良　/　児童指導員　川村拓磨
児童指導員　佐藤充輝　/　保育士　大芝さと

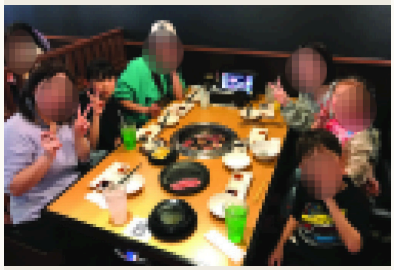
2025.04.12

# 新たな門出を、祝って。

新入園・入学お祝い会と焼肉会食







新しく幼稚園や学校へ進学する子どもたちを祝う「新入園・入学お祝い会」を挙行いたしました。開会当初、子どもたちは緊張した面持ちでしたが、新しい環境での生活に向けた期待や目標を一人ひとりが堂々と発表しました。その姿からは大きな成長と頼もしさが感じられ、園長や職員からの励ましの言葉に真剣な眼差しで耳を傾ける様子に、会場は温かな空気に包まれました。

発表のたびに送られる拍手や、互いを思いやる優しい表情も印象的で、終始安心感のある雰囲気の中で進行いたしました。式典後には記念撮影が行われ、新しい制服に身を包んだ子どもたちが、きょうだいや職員とともに照れながらも嬉しそうに写真に収まる微笑ましい光景が見られました。参加した子どもたちからは、「制服を着てみんなの前に立つのは緊張したけれど、発表できてよかった」「先生の話が心に残った」といった感想が寄せられ、それぞれの努力や成長を分かち合う貴重なひとときとなりました。

その後は子どもたちと職員全員で会食に向かい、焼肉を囲んで親睦を深めました。食事の場では自然と会話が弾み、終始にぎやかで楽しい時間となりました。普段は周囲との関わりが控えめな中学生が、年下の子に甲斐甲斐しく肉を焼いてあげる姿や、デザートを嬉しそうにおかわりする姿など、子どもたちの思いやりや無邪気な笑顔が随所に見られ、職員にとっても心温まる交流の機会となりました。

職員からは、「次なる生活に向けて意志を表明する立派な姿に感動した」「食事の場面で、普段とは異なる一面や子ども同士の温かな関わりが見られて嬉しかった」との声が上がっています。お祝い会から会食まで、和やかな雰囲気の中で子どもたちの門出を共に祝うことができたことは、私たち職員にとっても大きな喜びです。これから始まる新しい生活の中で、子どもたちがさらに健やかに成長していく姿を、引き続き温かく見守ってまいります。

※掲載写真には、個人情報保護のため顔部分に加工を施しています。

2025.05.02–03

# 自然の中で、力を合わせて。

小学生 春キャンプ







令和７年5月2日（金）・3日（土）、小学生を対象とした春のキャンプを実施しました。今回は、子どもも職員も初めて訪れるキャンプ場での開催でした。出発前から子どもたちは「いつ着くの？」「どんなところかな？」と期待に胸を膨らませ、電車の中でも景色に目を輝かせる姿が見られました。キャンプ場に到着すると、まずは昼食のバーベキューの準備に取りかかりました。

火起こしや食材の下ごしらえに挑戦する子どもたちの姿には、「自分たちでやってみたい」という意欲が感じられました。「火がついたよ！」「次は野菜切るね」と声をかけ合いながら、自然の中での調理に夢中になる様子が印象的でした。午後はハイキングに出かけました。険しい道のりに苦戦する姿もありましたが、「がんばろう」「あと少しだよ」と仲間を励ます声が自然に生まれ、最後まで全員で歩き切ることができました。

ふだんはあまり目立たない子が他児に声をかけたり、年下の子を気遣ったりする姿も見られ、子どもたちの優しさや思いやりの心を改めて感じました。夕食では、班ごとにカレー作りに挑戦しました。それぞれの班で役割を分担しながら、協力して調理を進めました。「自分たちで作ったから、すっごくおいしい！」と笑顔で話す子どもたちの姿から、自分の力でやり遂げた達成感や他児と力を合わせることの喜びを感じている姿が見られました。

夜は体育館でドッジボールや大縄跳び大会を楽しみました。いつもは関わることの少ない学年同士がチームを組み、力を合わせて遊ぶ姿に、集団の中で育まれる協調性や社会性の芽生えを感じました。「夜に体育館で遊ぶのが楽しくて、いつもよりテンションが上がった！」という感想も聞かれました。翌朝は少し眠そうな表情を浮かべながらも、「おはよう！」と元気に挨拶する子どもたちの声が響きました。

外の景色を眺めながらの朝食は、自然の中で過ごす穏やかな時間となりました。天候の関係で川遊びは叶いませんでしたが、「雨だったけど、みんなで作ったご飯が一番楽しかった」「同じロッジで寝たのが新鮮だった」と、子どもたちは与えられた環境の中で工夫して楽しんでいた様子が見られました。今回の春キャンプを通して、子どもたちは自然の中で他児と過ごすことで、協力する力や思いやる気持ちを育んでいました。

職員としても、子どもたちの新たな一面や成長する姿に触れることができ、大変貴重な機会となりました。さまざまな体験を通じて得たこの2日間の思い出が、子どもたちの心に残る特別な経験となってくれることを願っています。

※掲載写真には、個人情報保護のため顔部分に加工を施しています。

2025.05.26

# 友達と過ごす、特別な一日。

花園精舎 子ども祭り







5月26日、私たちは花園精舎の園庭にて子ども祭りを開催いたしました。この日は、子どもたちが日頃から仲良くしている友達を学園に招待することができる、一年に一度の特別な日となっています。祭りの前日には、友達が来てくれることを心待ちにしてわくわくしている子どもたちの姿や、反対に本当に来てくれるだろうかと心配そうにそわそわしている子どもたちの姿も見られました。

当日を迎えると、たくさんの友達が会場に駆けつけてくれて、子どもたちは大喜びでした。友達が来てくれたことに安心して、子どもたちの顔には自然と笑顔が溢れ、会場全体が賑やかで活気ある雰囲気に包まれました。お祭りの中では、花園精舎の職員たちが様々な出店を開いており、輪投げや玉入れといった定番の遊びから、プラバン作りなどの工作体験まで、多種多様な出し物を子どもたちは存分に楽しんでいました。

また、プレゼント企画のコーナーでは、多くの子どもたちが当たるかどうかで一喜一憂しながら、盛り上がっている様子が見られました。祭りの最後には、友達同士でお互いに今日の感想を共有し合う姿が見られ、とても印象的でした。行事全体を通して、子どもたちは学校の友だちとさらに絆を深め、仲を深めることができたように感じられました。また、地域の小学生たちを招待することによって、普段施設の中では見ることのできない子どもたちの新しい一面や表情を見ることができたのも大きな収穫でした。

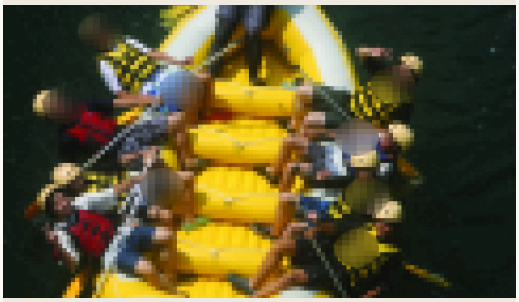
今後も引き続き、子どもたちが心から楽しめるような行事を企画し、実施していきたいと考えています。

※掲載写真には、個人情報保護のため顔部分に加工を施しています。

2025.08.04–05

# 夏の冒険が、自信になる。

中高生旅行 / 恵那峡散策とラフティング体験







8月4日・5日の２日間、中高生を対象とした宿泊行事を行いました。今回は、普段の学校生活や日常の環境から少し離れ、自然の中での体験や他児との交流を通して心も体もリフレッシュできる時間となりました。行きの電車は、あえて普通電車を乗り継いで向かいました。移動だけでもなかなか大変でしたが、その道中で普段あまり話す機会が少ない職員や他児との会話がはずみ、気がつけば笑顔でいっぱいの車内になっていました。

「しんどい」と思っていた時間が、いつの間にか「楽しい時間」に変わっていたことに、子どもたち自身も驚いていたようでした。恵那峡の散策では、雄大な景色や川の流れに包まれ、子どもたちは自然に目を輝かせていました。大阪ではあまり見ることのないトカゲを発見し、夢中になって観察する姿もありました。生き物との出会いは、子どもたちにとってただの遊びではなく、好奇心や「もっと知りたい」という探究心を刺激していたように感じます。

写真スポットでは子ども同士で記念撮影を楽しみ、笑い声が聞こえてきてとても楽しむ姿が見られました。ホテルに到着してからは、大きなお風呂やバイキングを満喫しました。夜は卓球やカラオケで大いに盛り上がり、最初は恥ずかしがっていた子も、年上の子が先に歌ってくれたことで自然と安心し、勇気を出して歌うことができました。遊びを通して年齢の枠を越えた交流が広がり、笑顔の輪がどんどん大きくなっていきました。

就寝前には布団に入って職員や他児とおしゃべりをする姿もあり、安心した気持ちで１日を締めくくることができました。2日目はいよいよラフティング体験です。川の流れに揺られながら進むボートは、まるで自然のアトラクション。最初は「落ちたらどうしよう」と不安そうにしていた年下の子も、ライフジャケットの安心感や年上の子の励ましによって少しずつ表情が和らぎ、やがて「楽しい！」と声をあげながら全力で楽しんでいました。

急流ではスリルを味わい、穏やかな場所では飛び込みや水遊びをして、子どもたちの笑顔は太陽の光に負けないくらい輝いていました。ゴールした時には、心地よい疲れとともに大きな達成感に包まれている様子がとても印象的でした。帰りの電車では疲れが見える子もいましたが、その中でも「また行きたい」「最高だった」という声が次々に聞かれ、他児や職員と振り返りながら笑い合う姿がありました。

行事が終わった後も思い出話が尽きないほど、子どもたちにとって充実した２日間になったのだと感じました。今回の宿泊行事を通して、子どもたちは自然に親しむことの楽しさや、他児と協力し合う大切さを肌で感じていました。不安を乗り越えて挑戦した姿、他児と声を掛け合いながら一体感を深めた姿は、確かな成長として私たち職員の目にも映りました。普段の施設生活ではなかなか見られない表情や関わり合いが広がり、子どもたちの持つ可能性や力を改めて感じる２日間となりました。

これからもこうした体験を通じて、子どもたちが自信を持ち、他児との絆を深め、次の一歩へとつなげていけるように見守っていきたいと思います。

※掲載写真には、個人情報保護のため顔部分に加工を施しています。

2025.11.19

# 頑張った日を、食卓で。

施設運動会 祝勝会







11月19日に施設内で運動会の頑張りを称える「祝勝会」を行いました。当初は全員で集まる予定でしたが、インフルエンザなどの流行を考えて、今回はそれぞれの生活単位である「ユニット」ごとに分かれて実施しました。大規模なパーティーはできませんでしたが、その分、子どもたち一人ひとりの表情をじっくりと見つめることができ、職員にとっても心の距離がぐっと縮まるような温かな時間となりました。

お祝いの時間が近づくと、職員がテーブルの上に彩り豊かなお祝いメニューを並べていきます。一つひとつのお皿が運ばれるたびに、子どもたちは「わあ、すごそう！」「早く食べたいな」と目を輝かせて集まってきました。普段は少食だったり、好き嫌いがあったりする子も、この日は自分たちのために食事が用意される特別な雰囲気に背中を押されたのか、驚くほど元気に食べていました。

配膳をしながら、おいしそうに頬張る子どもたちの笑顔を見て、私自身の心もポカポカと温まるのを感じました。「自分のことを大切に想ってくれている人がいる」という安心感が、子どもたちの心を満たし、健やかな食欲につながっているのだと改めて実感した瞬間でした。食事中、どのユニットでも一番の盛り上がりを見せたのは、やはり運動会の思い出話でした。

「リレーであと少しだったのが悔しかった」「でも、みんなで応援したのが一番楽しかったよ」と、自分の言葉で一生懸命に語る子どもたちの姿がありました。結果としての勝敗以上に、仲間と手を取り合い、最後までやり遂げたという確かな自信が、子どもたちの中に強く残っています。そんな子どもたちの成長を間近で感じ、思わず胸が熱くなりました。一つの行事を通じて、子どもたちが内面からたくましく変化していく様子を見届けられることは、この仕事ならではの大きな喜びです。

今回の祝勝会は予定とは異なる形での開催となりましたが、どのような状況でも子どもたちが心から楽しみ、成長できる環境を整えることが私たちの役割です。現場では思い通りにいかないこともありますが、その都度職員同士で考え、工夫を重ねる過程にこそやりがいがあります。これからも一つひとつの時間を大切にしながら、子どもたちの輝く笑顔を守り続けていきます。

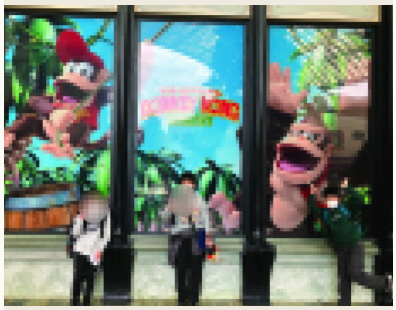
※掲載写真には、個人情報保護のため顔部分に加工を施しています。

2025.11.24

# 楽しさを、一緒に分け合う。

ユニバーサル・スタジオ・ジャパン外出行事







11月24日に子どもたちが指折り数えて待ちわびていた「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」へのご招待を頂きました。当日の朝、集合場所に集まった子どもたちの瞳は期待でキラキラと輝き、「早く行きたい！」「あのアトラクションには絶対乗りたいよね」といった賑やかな声が響き渡りました。目的地へ向かう電車の中でもその熱気は冷めることなく、窓の外の景色が変わるたびに小さな歓声や笑顔がこぼれるなど、これからの冒険への高揚感に包まれた最高のスタートとなりました。

パークに到着してからの子どもたちは、賑やかな雰囲気の中でも落ち着きを持って行動しており、その成長した姿に驚かされました。特に心が温まったのは、ポップコーンなどの軽食を楽しんでいた時のことで、自分の分だけでなく「一緒に食べる？」と、自然な様子で周りの友だちへ声を掛ける姿が見られました。誰に言われるでもなく、相手を思いやる優しさが日常の中に根付いていることを実感し、同行した職員も思わず顔がほころぶ瞬間でした。

アトラクション選びの場面でも、素晴らしいコミュニケーション能力が発揮されて「次はこれに乗りたいな」という自分の希望を伝えつつも、「さっきは私の意見を聞いてもらったから、次は〇〇くんの行きたいところに行こう」と、子どもたち同士でしっかりと話し合い、折り合いをつけていたのです。集団生活の中で培ってきた社会性が、このような特別な行事の場でしっかりと花開いている様子は、非常に頼もしく感じられました。

また、食事の際には年上の子が率先して全員分のトレーを片付けるなど、自ら考えて役割を果たそうとする自立した姿勢が印象的でした。人気パークということもあり、時には長い待ち時間もありましたが、子どもたちはその時間さえも自分たちで楽しいものへと変えてしまいました。しりとりやリズムゲームを自分たちで始め、「待っている間もみんなと一緒なら楽しいね」と笑い合う前向きな姿勢は、私たち大人にとっても大切なことを教えてくれた気がします。

その後のお土産選びでは、限られたお小遣いの中で「これなら買えるかな？」と、一生懸命に計算しながら選ぶ姿が印象的でした。その姿から、少しずつ自分で考えて決める力が身についてきていることを感じ、私たちにとっても嬉しいひとときとなりました。パークを満喫し、友だちと感想を語り合いながら歩く子どもたちの表情は、出発前よりもどこか大人びて見えました。

今回の行事は、単なる思い出作りだけではなく、譲り合いや助け合いといった「心の成長」を再確認できる貴重な機会となりました。私たちはこれからも、こうした豊かな経験を通じて、子どもたちが本来持っている優しさや強さを引き出せるよう、一人ひとりの歩みを全力で支えていきたいと考えています。

※掲載写真には、個人情報保護のため顔部分に加工を施しています。

2025.12.25

# 一年の努力に、拍手を。

クリスマス会







今年のクリスマス会は、この１年間、１人ひとりが積み重ねてきた努力を讃える「表彰式」からスタート。大勢の視線が集まる緊張感のなか、各ユニットから１位として名前を呼ばれた子の誇らしげな表情と、それをまるで自分のことのように喜びを分かち合う、あたたかな拍手がその空間を包み込みました。続く出し物の発表の場では、積み重ねてきた練習の成果が発揮されました。

「練習が大変だった」と本番直前まで不安を口にしていた子も、いざ発表の場に立つと、凛とした姿で最後までやり遂げることができました。客席からの温かい笑い声や拍手に包まれ、発表を終えた子どもたちの瞳は、大きな壁を乗り越えた達成感でキラキラと輝いていました。また、職員達によるバンド演奏では、大人の全力のパフォーマンスに子どもたちも大爆笑。

立場を超えてみんなで笑い合い、会場の熱気は最高潮に達しました。メインイベントの後は、各ユニットに分かれてさらに絆を深める時間を過ごしました。ここでは2位、3位の表彰も行われ、少し照れくさそうに、けれどもしっかりと賞状を受け取る子どもたちの姿が印象的でした。惜しくも今回は選ばれなかった子どもからも「来年こそは頑張る！」という前向きな言葉が聞かれました。

その姿に、悔しさを力に変え、次へ進もうとする強さを感じました。行事を通して、一人ひとりの心の中に「次への意欲」という小さな種がしっかりと芽吹いていることを、私たち職員も嬉しく思っています。そして、お待ちかねの食事の時間。ダイニングテーブルに並んだ色鮮やかな特別メニューを目にした瞬間、「すごい！」「おいしそう！」「早く食べたい！」と、言う姿が見られテーブルを囲みながら、楽しい食事の時間を過ごしました。

この一日を通して、子どもたちの内面の成長を強く感じました。準備に追われる職員の姿を見て、普段は照れ屋な子が「俺も手伝うわ」と声をかけてくれた場面もありました。行事は、自分のことだけでなく周りを思いやる気持ちを育てる大切な機会になっていると、あらためて実感しました。これからも子どもたち一人ひとりに寄り添いながら、共に歩んでいきたいと思います。

※掲載写真には、個人情報保護のため顔部分に加工を施しています。

2025.06.25

# 学校と施設で、支える。

英田南小学校との交流会



本研修会は、隣接する英田南小学校の教員の皆様に、児童養護施設についての理解を深めていただくことを主な目的として毎年開催しています。児童養護施設で生活する子どもたちの多くは、日中は地域の学校に通学しており、学校と施設の密接な連携が、子どもたちの健やかな成長にとって不可欠です。これまでも英田南小学校とは良好な関係を築いてまいりましたが、この研修を通じて、教員の皆様に施設の実情や子どもたちが抱える背景をより深く理解していただくことで、これまで以上に小学校との連携を強化し、児童養育の安定化を図ることを目指し実施しています。

施設長からは、本研修会開催の意義、そして学校と施設が協力して子どもたちの最善の利益を追求していくことの重要性について、述べられました。研修の中核となるプログラムとして、当施設の主任が作成したスライドを用いて、児童養護施設花園精舎の詳細な情報をご紹介しました。具体的には、児童養護施設の役割と機能、花園精舎の沿革と理念、入所している児童の背景と特性、日々の生活の様子と支援内容、学校との連携における具体的な配慮事項、守秘義務と個人情報の取り扱いについてなど、幅広い内容を取り上げました。

スライドには、施設の日常風景や子どもたちの活動の様子を写真で紹介するなど、視覚的にも理解しやすい工夫を凝らしました。参加された教員の皆様からは、実際の施設の様子が分かりやすかったという声や、子どもたちがどのような環境で生活しているのかイメージできたといった感想をいただきました。研修のもう一つの重要な柱として、花園精舎の職員と英田南小学校の教員が混合したグループに分かれ、グループワークを実施しました。

お互いの立場や日々直面している課題について率直に意見交換し、コミュニケーションの強化を図ることを目的としました。グループワークでは、子どもたちの学校生活における課題と対応、家庭訪問や保護者面談に代わる施設との連携方法、学校行事への参加における配慮事項、日常的な連絡体制と情報共有の方法など、様々なテーマについて話し合いが行われました。

各グループでは、具体的な事例をもとに、どのように対応すればよいか、何に配慮すべきかといった実践的な議論が交わされました。職員と教員が直接対話することで、お互いの専門性や視点の違いを認識し合い、それぞれの強みを生かした協力体制を築くための貴重な機会となりました。子どもたちにとって、学校と施設は生活の両輪です。双方が密に連携し、一貫した支援を提供することで、子どもたちは安心して学び、成長することができます。

今回の研修会で築かれた信頼関係を大切にしながら、今後も定期的な情報交換や合同研修の機会を設けていく予定です。

2025.06.20

# 災害時にも、暮らしを守る。

児童福祉施設のための防災研修 / 阪神・淡路大震災の教訓に学ぶ



研修の記録

## 平時から備え、子どもたちの安全と尊厳を守る。

講師：社会福祉法人 神戸少年の町
総合施設長 遠藤洋二先生

本研修では、約30年前に発生した阪神・淡路大震災の貴重な経験を基に、児童福祉施設が災害にどのように備え、災害時に職員がどのような対応を取るべきかについて、具体的かつ実践的な学びを得ることができました。遠藤先生の実体験に基づく講義は、災害対応における多角的な視点と、平時からの備えの重要性を改めて認識させるものでした。研修を通じて最も強調されたのは「災害の影響を想定することの大切さ」です。

災害時には目の前の子どもへの直接的な支援だけでなく、他の福祉分野や地域全体の状況も視野に入れた柔軟な対応が求められます。児童福祉施設は孤立した存在ではなく、地域の福祉ネットワークの一部として機能することが期待されています。特に重要な点として、災害による「直接死」だけでなく「関連死」が多く発生している現状が示されました。関連死とは、災害による直接的な被害ではなく、避難生活の長期化や環境の悪化、医療・福祉サービスの中断などによって生じる死亡を指します。

福祉専門職の立場から、こうした関連死を減らすための支援や配慮が可能であり、その役割の重要性が指摘されました。被災者支援において心に深く残ったのは、「自分でできること」と「自分でしたいこと」が制限されることによる無力感についての指摘です。災害時には安全確保や効率性を優先するあまり、被災者の自主性や選択の機会が奪われがちになります。

しかし、避難所等においても、できる限り当事者の意思を尊重し、本人が役割を持てるような関わり方が、心理的な安定と尊厳の維持につながります。子どもたちに対しても同様で、年齢や発達状況に応じて「今何が起こっているのか」「今後どうなっていくのか」といった情報を丁寧に伝えることが重要です。不確実な状況下でも、適切な情報提供と意思決定への参加は、子どもたちの不安を軽減し、レジリエンス(回復力)を高めることにつながります。

災害発生直後から約12時間は、外部からの支援がほとんど期待できず、施設内の職員だけで対応しなければならない「初動対応」の時間となります。この時間帯は最も混乱が大きく、かつ迅速な判断と行動が求められる重要な局面です。そのため、日頃から職員一人ひとりが災害時を想定した行動を考え、個人としても対応できる力を養う必要があります。マニュアルの整備も重要ですが、それ以上に各職員が自分の役割を理解し、状況に応じて柔軟に判断できる能力を身につけることが求められます。

定期的な訓練や研修を通じて、こうした対応力を組織全体で高めていくことが不可欠です。実際の災害時における具体的な情報として、「八尾空港」を支援拠点として活用できる可能性が示されました。これは物資の調達や医療支援、さらには広域避難の際の重要な拠点となり得る情報です。こうした地域の具体的な資源を把握しておくことは、災害時の選択肢を広げ、より効果的な対応につながります。

また、災害が長期化する場合は、被災地に留まることにこだわらず、他地域への避難も現実的な選択肢として考えるべきだという指摘がありました。子どもたちの安全と日常生活の継続を最優先に考えるならば、一時的に施設を離れることも視野に入れる必要があります。そのためには、予め他地域の施設と相互支援協定を結んでおくことが有効な対策となります。

# 「当たり前の暮らし」を、守り続けるために。

防災研修での学びと、今後の取り組み

01 暮らしと心理的安定　02 備蓄と連絡体制　03 情報共有と相互支援

子どもたちへの支援において特に強調されたのは、単に食事や生活物資を提供するだけでなく「暮らしそのもの」を整えることの重要性です。災害時であっても、可能な限り日常に近い生活リズムや環境を維持することが、子どもたちの心理的安定につながります。これには、規則正しい食事や睡眠、清潔な環境、学習や遊びの機会、そして何よりも安心できる人間関係の維持が含まれます。

緊急時だからこそ、こうした「当たり前の暮らし」を守る努力が、子どもたちの回復力を支える基盤となります。研修の中では、各職員からの質問に対して、日常的に備えておくべき具体的な事項についても言及がありました。風邪薬や便秘薬などの常備薬は、災害時にすぐに入手できない可能性が高いため、十分な量を備蓄しておく必要があります。また、備蓄品については定期的な見直しが不可欠で、賞味期限や使用期限の確認、季節に応じた内容の調整などを継続的に行うことが求められます。

さらに、災害時に必要となる物資は食料や水だけではありません。子どもたちの年齢や特性に応じた生活用品、医療・衛生用品、さらには心理的安定のためのおもちゃや絵本なども重要な備蓄品となります。こうした多様なニーズを想定した準備が、実際の災害時に大きな差を生むことになります。個々の職員の対応力向上と並行して、組織としての体制整備も重要です。

災害時の指揮命令系統の明確化、職員間の連絡手段の確保、施設外との通信手段の複数化など、システムとしての備えが必要です。また、夜間や休日など、職員が少ない時間帯に災害が発生した場合の対応についても、具体的なシミュレーションを行っておくことが望まれます。今回の研修を通じて、職員一人ひとりが「災害時にどう動くのか」「子どもたちをどう守るのか」という意識を高めること、そして平時から備えを進めていくことの大切さを深く認識しました。

阪神・淡路大震災から30年が経過し、当時の経験を知る職員は少なくなっていますが、だからこそこうした教訓を学び、次世代に伝えていく責任があります。今後の具体的な取り組みとして、まず職場内での情報共有を強化し、本研修で得た知識を全職員で共有する機会を設けます。次に、備品の定期的な見直しを実施し、実際に使用できる状態を維持します。さらに、他施設との連携体制の構築を進め、相互支援の仕組みを整えていきます。

これらの取り組みを着実に実行することで、万が一の災害時でも、子どもたちの安全と日常を守り抜くことができる強靭な体制を構築していきたいと考えています。災害は予測できませんが、備えることは可能です。今日学んだことを明日からの実践につなげ、子どもたちが安心して暮らせる環境を維持していくことが、私たち児童福祉施設職員の使命であると改めて感じました。

本見開きは、原本に掲載された研修報告を再構成したものです。

2025.06.05

# 学びの場を、ひらく。

東大阪大学短期大学部 実践保育学科 施設見学会





令和7年6月、当施設において東大阪大学短期大学部実践保育学科の学生の皆様をお迎えし、実習前教育およびキャリア形成支援の一環として施設見学会を執り行いました。当日は、施設長・照井眞哉による開会の挨拶から始まり、児童福祉の現状と当施設が担う社会的役割、そして子どもたちの権利養護（アドボカシー）に基づいた支援方針について説明いたしました。

その後、同学科の福鹿慶子講師による引率のもと、学生の皆様を居住棟および各専門機能室へとご案内いたしました。見学の過程では、子どもたちの日常生活の動線に配慮した環境構成や、多職種連携（チームアプローチ）による包括的なケア体制について具体的な解説を行いました。特に、保育士や児童指導員が個々の児童の愛着形成や自己肯定感をどのように育んでいるか、その専門的な関わり（ワーキング・アライアンス）の実際を視察いただきました。

参加した学生の皆様からは、「生活場面における一つひとつの配慮が、児童の心理的安全性に直結していることを肌で感じた」「講義で学んだ理論が、実際の現場でどのように具現化されているかを深く理解でき、将来のキャリアパスを描く上で極めて有益な機会となった」といった、高い専門的関心に基づく感想が多く寄せられました。当施設といたしましては、今後も近隣の教育機関との強固なパートナーシップを維持・発展させ、次世代を担う保育・福祉人材の育成に寄与していく所存です。

理論と実践を繋ぐ学びの場として、学生の皆様の志を心より応援しております。東大阪大学短期大学部実践保育学科の皆様、誠にありがとうございました。

## 理論と実践をつなぎ、
## 次世代の保育・福祉へ。

WITH GRATITUDE

# 温かなご支援に、感謝を。

寄付・寄贈のご報告

地域の皆様、関係各位の温かいお力添えに、深く感謝いたします。

株式会社マルハン 水走店
株式会社マルハン 中石切店
株式会社播磨屋
株式会社Daska＆Desiree
安楽寺
久保溶接工業株式会社
株式会社広拓
株式会社たくみ工芸
株式会社チュチュアンナ 1%クラブ
マジックバード若江
協同組合大阪紙文具流通センター
引田青果
協同食品株式会社
公益財団法人 日本漢字能力検定協会
有限会社 広新
コストコホールセールジャパン株式会社 門真倉庫店
真宗大谷派難波別院
一般社団法人 全国食支援活動協力会
餃子の王将 中環巨摩橋店
餃子の王将 中央大通り長田店
株式会社オフィスボストン
株式会社フレーベル館
西村 真菜実 様
会見 光宏 様
株式会社クオンテックス
一般社団法人 日本レコード協会
株式会社ブールミッシュ
旭食品株式会社
大阪府遊技業組合連合会
株式会社アミパラ
株式会社サン・フレバー
一般財団法人 日本出版クラブ
大阪本場青果卸売協同組合
全国シャンメリー協同組合
日本レッグニット卸商協同組合
日本鏡餅組合
株式会社FRAGRANCY
株式会社浪花堂
赤帽大阪府軽自動車運送協同組合
松浦電機システム株式会社
ワールドメイト
株式会社サイバードリーム
柏本倉庫 06BASE
田邉 正秀 様
磨 輝枝 様
渡辺 望美 様

順不同、法人名・団体名敬称略

## 苦情申し出窓口

社会福祉法人花園精舎では、子ども達が明るく元気に安心感を持って生活を送れる快適な環境作りのため、意見・苦情に応じられるよう体制を整えています。

| | |
|---|---|
| 苦情解決責任者 | 照井眞哉（施設長） |
| 苦情受付担当者 | 田中陽子（事務員） |
| 第三者委員 | 土井栄子 / 鈴木啓介 |
| お問い合わせ | 072-962-2132 |

# これからも、
# 子どもたちとともに。



**社会福祉法人 花園精舎**

〒578-0924
大阪府東大阪市吉田5丁目15番14号

TEL　072-962-2132
FAX　072-962-3610

h-seisha@air.ocn.ne.jp
https://www.h-seisha.com/